
世界とつながる社会福祉現場

1 工程@ 1 円～知的障害者の労働現場 007

千葉 晃央

■UNIQLO・ユニクロ

『ユニクロ帝国の光と影』（横田増生著 文芸春秋）を読んだ。ユニクロといえば、障害者雇用率がトップの企業だ。障害者雇用を頑張っているので「みんな！ユニクロを買おう！」ということを障害者に関わる関係者が複数広く伝えていたりもする。この本を読むと、ユニクロという社風、ユニクロという企業のスタイルが、今の障害者雇用の状況（非常勤雇用、低収入、マニュアル重視等）とマッチしている部分が多いにあるのではないかと感じた。

■知的障害⇒バックヤードなのか？！

ユニクロでの障害を持ったスタッフの主な仕事はバックヤードときいている。知的障害者領域では、一般就労の場が店舗の場合、そのようなことが多い。具体的にいうとレストラン、旅館、ホテル等のバックヤードとなる。これに該当しない事例では、京都駅のすぐ駅前にできたイオンモール KYOTO の中にも障害者雇用をたくさんしていた店舗があった。開店時には大いに注

目された。そこでは、売り場に知的障害を持つスタッフが働いていた。オープン後しばらくたった今年の 11 月、その店舗は給料日の前日に、給料未払いのまま、一方的な解雇通知等で突如閉店。42 人の障害者を解雇し、新聞をにぎわすことになったのも記憶に新しい。工場や、詰め込み作業など、活躍している場は、やはりバックヤードということが多いように思う。

■ユニクロの中国下請け工場

『ユニクロ帝国の光と影』では、ユニクロの下請けをしている中国工場での作業手順が紹介されていた。ユニクロの高品質を象徴するものとして、限界不良品率 0.3%と、アパレル業界で驚異的な数字がある。それにいたる作業手順のポイントの一つはこうだ。札のタグ付けを例にとると、あらかじめ 50 着という区切りを仮に設けるとして、値札の数も 50 枚、服の数も 50 着と事前に数えて、それだけを他の作業台から独立した作業台に置いてから、作業を始める。その作業台には、作業をする一種類の商品のみ置くという状態になる。正しく作業がで

きた時には、50着分の作業終了時に商品、タグ等、全てがちょうどなくなる。それが確認できて、はじめて作業の完了。出来上がった50着を、全て梱包等を行い、作業台の上に何も無い状態にしてから、次の50着に移る。そうすることで、サイズSの服に、サイズMのタグが付くようなサイズ違い、異なる色のタグが付くような色違いのミス等を防いでいる。本によると、ユニクロが依頼している中国工場では、ユニクロの監視が少しでも甘くなると、この作業手順が守られず、不良が出てしまうということがあるそうだ。

だ。しかも、このやり方は恒常的であり、緩めたりはしない。そして、ユニクロにはない全商品、全検品を職員の手で行ってきた。(ユニクロは抽出検品とのこと。)つまり、業界の驚異的な不良品率を誇るユニクロと同じレベル、もしくはそれ以上のことをしているともいえるのだ。この本を読んでも、あらためて、自分たちが行っている作業の品質に一定の誇りのようなものも感じた。そして同時に、これまでもわかってきたことだが、中国工場と知的障害者の就労現場が下請け作業という共通の役割を担っていることを再度、認識することになった。

■ユニクロ以上の作業をする福祉現場

この作業のやり方は、私がいた知的障害者の就労現場での作業の流し方と全く同じ

■国際品質基準に応える作業工程

知的障害者の労働現場であっても、取引先が求める品質に応えられるかどうかを取



り引きの前提にあるのは言うまでもない。福祉施設であろうとなかろうとだ。企業が自社の品質を保ち、お客様からその品質で信頼を得るために国際品質基準 ISO9000 シリーズを獲得しているところもある。その時には当然、私たち障害者の就労現場の作業工程も、国際品質基準 ISO の規定に適合したものとなる。作業工程のマニュアル化、不良品の発生メカニズムの検証等、取引先の方々と頭をつき合わせて、福祉施設の職員は取り組んできた。そういった、経験からも、自分たち障害者の作業現場の品質には一定のものがあるとは感じてはきた。そして、こういった一般企業との取引が私たちの労働現場の作業品質を引き上げ、維持する機会にもなってきた。

■一般企業に仕事を依頼する立場に

しかし、国からのアプローチの影響もあり、結果、下請け作業からの脱皮が進み、障害者福祉施設では自主製品が流行している事実はこれまでも触れてきた。一昔前とは異なり、福祉施設職員が商品開発、販売を行っている。それまで、下請けで仕事をもらっていた企業に、今度は自分たち施設側が商品企画をし、作業を依頼している話もきこえてきている。立場の逆転は、驚きと喜びも一瞬よぎるが、そのことで障害者の収入が上がったという話は今のところきこえてこない。

■中国から届いたモノのなかに…

10年ぐらい前、中国から届いた商品をパッケージに入れるような仕事をよく施設で

やらせてもらった。中国から届いた箱を開けるといろいろなものが商品の他に混ざっていることがあった。お菓子のカケラがその一つだ。現在、きこえてくる中国の労働状況のひとつに、早朝から深夜までの作業実態があるからだろう。前記の本によると、現在のユニクロの中国にある下請け工場でも様子は同じようである。お菓子でもつまみながらでもやらないとおなかですいて…という労働条件が実情なのだろうと思う。（作業量による出来高払い、不良品にはその作業員に罰金もあるようだ！）

他には、こんなものが出てきたこともあった。カッターとして中国での作業時に使われたと思しきものだ。それはカッターの替え刃に、手で持つ、握るところとして直接緩衝材のウレタンをぐるぐると巻き、上から更にガムテープでぐるぐる巻きにして止めたものだ。日本なら、100円ショップでもカッターは買えるのに、と一瞬思いながら、100円の価値がまず違うとか、経済の仕組みが違うなど、一呼吸して、いろんなことが頭を駆け巡った。

■9.11 アメリカ同時多発テロで…

この10年間で、変化したところもある。物の流れだ。10年前は、中国で生産、日本で最終加工、消費であったが、今は逆に、日本の商品を加工して、中国に出荷して、中国で消費するという流れに変わってきた。2011年2月に流れた日本と中国のGDPの逆転のニュースは、私の現場からはこうした品物の動きとして、肌で感じていた。

2001年9月11日のアメリカ同時多発テロが起こった時、京都の知的障害者の収入

がアップした。それは、テロを恐れて、海外旅行者が減り、国内旅行が増える。国内といえば京都が人気の観光地。京都の観光客が増えると、お土産ものが売れる。そのお土産物というのが京都の大きな産業のひとつで、障害者の施設でも、多くの作業を担っている。そのため、作業の注文数がハネ上がり、結果として、京都の障害者の収入はアップしたのだ。

■子どもが作ったものを親が買う？！

このように、知的障害者の労働現場も世界とつながっている。つまり、社会の経済活動の一部なのだ。その一般的な経済活動の流れの中に関わっていることこそ、ノーマルであるという側面もある。なぜ、そのようなことをいうかと言えば、現実として、障害者が作った自主製品をその保護者が買う、その収入で、その子どもたちである障害者の収入ができるという、身内でお金がぐるぐる回っているだけという現実も、これまで長く続いてきているのも事実であるからだ。

このような現実があるのは、「京都」という場の力もあるだろう。京都の伝統工芸品を輸出もするし、海外からも観光客が訪れる、お土産も売れる。こういった地域性からも、世界とつながっている実感は強いかもしれない。このような地域ではないところは日本のあちこちにある。地域の特徴は様々だ。地域性からも、知的障害者の就労現場が影響を受けているのは言うまでもない。「知的障害者の就労現場 京都版」というのが私のこの連載の裏のタイトルともいえる。
(写真：橋本 総子)

